

平成29年度

小金井平和の日記念行事

「戦争体験談」
「平和行事参加の旅
感想文」

小金井市

はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を3年ごとに行っています。昭和28年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年12月20日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和35年10月3日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和57年4月1日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の本質からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和54年3月20日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和市長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成26年12月18日に戦後70年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づき実施する平和の日記念行事における戦争体験談発表者の体験談と、「平成29年度平和行事参加の旅」参加者の感想文を取りまとめ、冊子にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にさせていただければ幸いです。

平成30年3月

企画財政部広報秘書課

目次

【戦争体験談】

被爆体験記

川崎 利秋（90歳代 男性）	1
----------------	---

【平和行事参加の旅参加者による感想文】

平和行事参加の旅

岩田 結（30歳代 女性）	7
---------------	---

平和行事参加の旅

小林 初美（50歳代 女性）	8
----------------	---

平和記念行事に参加して

小林 由紀子（20歳代 女性）	10
-----------------	----

平和と安全

片倉 健太郎（50歳代 男性）	11
-----------------	----

核兵器のない世界

片倉 雅子（50歳代 女性）	12
----------------	----

被爆体験記

川崎 利秋（90歳代男性）

熊本の陸軍予備士官学校に入校しましたが、卒業を目前にして、怪我のため広島の自宅に帰って療養することになりました。

広島に帰ってからは「療養」ですから、毎日のんびりと過ごしていました。私は男ばかりの三人兄弟です。原爆当日の朝八時十五分頃は、真ん中の弟は何時もならば、その時間帯には100%安全な工場で仕事についている時間でした。養子にやっていたものですから、当日、休暇をとって広島県の三次（みよし）というところにある養家に、遊びに行くということで出掛けたところでした。原爆が投下された時間帯には、原爆投下の真下に近い地点で広島駅行きの電車を待っていたのです。

私はその時刻、暑いものですからメリヤスのパンツ一丁で、その下にく越中禪>をしめて、下の弟と並んで寝そべっていました。私が原爆が投下された時のショックで覚えているのは、「何か光ったためにびっくりした。」ということだけで、音の記憶は全くありません。瞬間的に顔を上げた時、屋根瓦の一角が吹き飛んで、真っ赤な火の玉が浮いていた……という記憶が鮮烈に残っています。一体、何がおこったのかサッパリ分からない。壁やガラスは吹き飛んで、家の中は砂塵がもうもう。その中を弟と夢中で玄関先に飛び出しました。軒先で弟と顔を見合わせたところ、弟が驚いた表情で「お兄さん。どうしたの。」というのです。弟の体は埃を被っていましたが異常ありませんでした。ひょいと自分を見たら<全身血だるま>になっていました。隣の家に遊びに行っていた母が、その家から飛び出してきました。母は埃を被っただけでしたので、私の体を見てびっくりして、「とにかくお医者さんに行かなければ。」ということで、私の手をとって近所のお医者さんに連れていってくれました。お医者さんもやられているわけですから、どうしようもありません。それで、また手をとってもらって帰ってきたんですが、帰る途中で町内の親切な人が、「こりゃー川崎さん大変だ。盥に水をはってあげるから、先ず体を洗いなさい。それから薬を付けたら。」といわれ、私は盥にはってもらった水で体を洗いました。

母は先に家に帰りましたが、家の中は大変な惨状で、何とか衣類を引き出

して、私の帰りを待っていたようです。

私は自宅まで帰って、母の顔を見たとき失神してしまいました。思い返すと原爆投下時、私は総ガラスの雨戸に平行に寝ていたんですね。その雨戸に直角に爆風が当たり、ガラスの破片群がパァーッと室内に吹き込んできたのです。私が立ち上がった時に、ガラスの破片群が私の全身に当たったのです。弟はガラス戸に近い場所に寝ていたのですが、かすり傷一つしていません。それは弟が起き上がる前に、ガラスの破片群が通過したからです。ところが私が寝ていたところに、物凄い大きなガラスの破片が突き刺さっていました。よくよく考えたら、小さいガラスの破片は、軽いから先に飛び、重いガラス片は遅れて飛んできたということです。一寸タイミングがずれていたら、重いガラスに頸動脈でも切られ、出血多量で死んでいたかもしれません。それとは反対にタイミング次第で、かすり傷一つ負わずに、外に逃げ出していたかも知れません。たまたま、その傷が私の命を救うきっかけになりました。後でメリヤスのパンツに開いた穴を数えたら、百以上ありましたから、全身では数百箇所になるだろうと思います。まだ二十歳位の若い体ですから、小さいガラスの破片が体に当たっても、おそらく、みんな跳ね返したようですね。傷口を洗う時、足の膝の内側が変だ…とあって傷口を見ると、光っているものが見えました。ガラスの破片が刺さっていたのでした。これをピンセットを借りて引っ張り出しました。その後、ガラスの破片が体から出てきたことはありませんので、ガラスが刺さったのは其処だけだったようです。全身の小さい傷から、血が相当量流れ出ていたものですから、貧血状態だったのでしょう。母の顔を見たとき気が緩んで気を失って倒れてしまったのだ…と思います。それからが大騒ぎになりました。たまたま、近所に赤十字のお医者がおられまして、注射器を持っておられたので、カンフル剤を注射してくださいました。ところが、注射をするのに先生の親指と人差し指の間が裂けており、「力が入れないので、刺すだけ刺すから、後は弟さんあんたが液だけ入れて。」といわれ、弟が注射器を押したらいいんです。私は失神していたので、全然わかりませんでした。そのようなことで、しばらくして私は息をふきかえしました。

その晩は、家の周囲にあった畠の畝のようなところに布（きれ）を敷いて寝転んで過ごしました。

すぐ、近くまで全焼してしまったのですが、幸いにも私の家は屋根の一角、

壁、雨戸などが吹っ飛んだりしましたが、なんとか残りました。骨組みもしっかりしていましたので、ある程度のスペースは、雨が降っても大丈夫でした。母と弟が家の中の一室を整理し、なんとか仮眠できる状態にしてくれました。その時、気が付いたのですが、洗濯物で白いものは焼けないで残っていたのです。黒いものは一瞬に火がついて燃えてしまったようです。

朝出かけたきりで消息の分からない弟を何とか探さなければ…ということで、私は翌日、体中が痛いのに杖をついて、末の弟と一緒に出掛け、白島町に渡る神田橋のたもとまで辿り着きました。とにかくたくさんの人が道の両側に横たわっていて、死んでいるのか生きていいのかわかりません。大変凄惨な光景でした。橋を渡ろうとしたところで、体がついていかないのを悟り、弟探しを諦め、弟と共に家に帰りました。そして七日・八日と心配しながら……。

九日の日に、母が国民学校での炊き出しのお手伝いに行っていたところ、親切な人が弟の消息を伝えてくれたのです。母は飛んで帰ってきて「和典の収容場所が分かった」という。「半ば諦めていた弟が生きている。」というので、傷だらけの体を忘れて飛び起きて、水筒に水を入れ、末の弟と二人で、収容されている場所泉邸（当時、浅野の泉邸といわれていました。今は縮景園という公園になっています）に駆けつけました。私の家から其処までは十分位かかりましたかね。行ってみたら、収容場所には火傷で体も顔も膨れ上がって、見分けがつかない状態で、沢山の人が所狭しと並べられていました。広いしどうしようもないので、私は係りの人に聞いてみたのですが、よくわかりません。「声を出して呼んで歩いたらどうですか。」といわれたので、大きな声で弟の名前を呼んで歩いていたら、片隅で反応があったのです。しっかりした声で「あ、お兄さん、僕此処だよ。」というんですね。それで近づいてみたら、焼けただれて顔も腫れあがり、ほとんど被服をまとっていない状態でした。その様子を見たたん、私は万感胸に迫って涙が出てきて止まりませんでした。付き添ってきた収容所の人達が「貴方がそんなことでは駄目だよ。弟さんを早く介護して家に連れて帰ってやらなけりゃ。」といわれたので、とりあえず喉が渴いているだろうから思い、水筒の水を飲ませました。沢山飲ますといかんで一寸飲ましてから、救護所の人達に応急の処置をしてもらいました。其処へ近所の人たちが担架を持ってきてくれました。

弟は体が大きい男でした。当時、修道中学校四年生でした。担架にのせ私が先棒を担ぎ、何も傷ついていない元気な近所の男の方が二人で、後棒を交替で担いでくれたらしいです。私は先棒を一人担いで（傷だらけの体で横たわっていただけに『気力というものは恐ろしいものだ』とつくづく思いました）家まで運びました。その間に母が一室を綺麗に整理して、布団を敷いてくれていました。其処へ弟を寝かしました。火傷にはジャガイモを潰したのを塗り付けると良いというんですね。何処にそういうものがあつたのか知りませんが、ジャガイモを潰したのを一生懸命、顔や全身に塗り付けた記憶だけが残っています。近所の赤十字のお医者さんにとりあえず診てもらいましたら、「此れは大変だな。とりあえず一生懸命介護しましょう。」といわれ、「なにかあつたら言ってください。」ということでした。私と母が両側について団扇であおいでやっていたんですが、弟は、はっきりと自分が被ばくした時の状況を逐一話してくれました。口調もしっかりしていました。「僕は八丁堀でショックを受けて跳ね飛ばされ、瞬間気を失ったが、そのうち気が付いて、それからずっと家をめざして川沿いに逃げた。何処かの川で火勢に追われて水に飛び込んだ。その晩は川岸で過ごした。翌朝、家をめざして帰ってきたんだが、結局、力尽きて焼け電車の中で一晩寝た。」ということでした。「焼け電車の中で寝ているところを、今の救護所へ収容された。」というところまで話してくれました。「僕は此処まで生き延びたんだから、絶対に死なないよ。」とはっきり言っていました。一通り話をしたら、突然しゃべらなくなり、昏睡状態に陥りました。それで一晩、私と母は寝ないで団扇で、あおいで看護したのですが、ずーっとそういう状態が翌日の二時か三時頃まで続きました。昏睡状態が続くので、お医者さんに診てもらいましたら、「これはもう諦めた方がよろしいのではないか。」という言い方をされました。ところが、ある瞬間、突然大きな声で歌を歌いだしたんです。それは田端義夫のヒット曲なんですね。たしか「母」ものだったと記憶しています。当時、弟は田端義夫ばりの美声といわれていました。つづいて今度は、弟にせがまれて私が教えた石川啄木の歌を歌いだしたんですね。それを歌い終わったら、急に、もがきだして手で顔を引っ掻こうとするんですね。それで慌てて母と私とで両手を押えました。どういう訳で当日持って行かなかったのか分かりませんが、弟が愛用していた〈日の丸〉の扇子が手元にあつたんですね。その扇子を開いて「おい見えるか。」と見せて、「此れであおい

であげるから。」といったら、腫れあがって閉じたままの目尻から、一条の涙がスーッと流れ落ちたんですね。扇ぎつづけているうちに段々とおとなしくなり、ピクリとも動かなくなりました。すぐ、下の弟にお医者さんに連絡してもらい、診てもらいました。「ご臨終です。」といわれ、間もなく二、三度大きな呼吸をしてから絶息しました。

弟の遺体は、近所の公園に焼却用の穴が沢山掘られていて、其処へ持って行って自分達の手で焼かなければなりません。そのために、重油の配給がありました。体を拭くといっても火傷の体ですから、どうしようもないんですが、一応綺麗にして、探し出した浴衣を着せ、担架に乗せて公園の横穴まで運って行きました。燃えそうな木等を沢山積みあげ、分けてもらった重油をかけ、私の手で火を点けました。うまく焼けないので二回位つけなおしましたかね、それでなんとか骨になってくれたので、その骨を母と弟とで拾ったわけです。

私が東京に出てきたのは昭和二十七年二月です。その後紹介を受け、母と弟と共に大仁温泉近くの医者に、「自家輸血」の治療を毎月一回、一年間受けた放か、症状が何も出ないで今日に至っています。

私は、原爆の症状が出ないものですから、原爆被爆者であるという意識が非常に乏しかったことと、生来のんきなものですから、なんのためらいもなく家内と結婚しました。家内自身はそういうことを知っていたものですから、子供が生まれてくるのが心配だったようですが、結局三人の子宝にめぐまれました。どの子も全く異状が見受けられず、今ではそれぞれ結婚しています。生まれてきた孫も異状がありませんので、ほっと致してる次第です。

私は、小金井市企画の「平和の旅」という催しに、被爆五十周年の前年、家内と一緒に参加させて戴きました。

初めて原爆の式典に参加、誠に感慨深いものがありました。たまたま、そういう企画に参加させていただく前に、伯父の跡を継いだ次男から、「四人（向こうの父親と長男と次女、私の弟）合同の五十回忌をやろう。」という呼び掛けがあり、七月三十日に法要を済ませました。

一旦広島から帰ってきて、あらためて八月五日・六日の小金井市の企画に参加。再び広島に行って参りました。そのことで「何か一つの区切り」がついたような気が致しております。

私の父は終戦の翌年の九月三十日に、満州から引き揚げ（葫芦島から博多

に上陸) できました。胃潰瘍の療養中、無理をして引き揚げてきたのでしよう、博多に上陸と同時に吐血し、そのまま友人宅で療養していました。私の所に父の本籍地の役場を経て連絡がきましたので、母と私と弟と叔母(父の実妹)と四人で、九州の友人宅へ参りましたところ、私達が着く三時間前に父は死んでいました。最後迄「子供達に会いたい。」といていたようです。友人宅で葬儀を行い、茶毘にふしました。持ち帰った遺骨は、父の出生地の高田郡の八千代市の墓におさめました。

母は三十年位前に亡くなりました。もう一人の弟も二十七年くらい前に亡くなり。いずれも私が骨を拾いました。私一人で家族全員の骨を拾うはめになりました。私は今年九十三歳ですが、幸いに健康体で暮らさせて戴いています。これは家族四人の寿命を引き継いで、少しでも世のため、人のために尽くせということなのかなあ…と思いつつ、 いろんな関わりの会で、お手伝いさせていただいているような現況です。

平和行事参加の旅

岩田 結（30歳代 女性）

私は以前、広島に行ったことがあるのですが、他にも行きたいところがあってゆっくり見ることができなかつたので、もう一度行きたいと思い、この旅に参加しました。

広島駅に着き、最初に向かったのは爆心地。T字の形が珍しい相生橋を目標に落とされた原爆は、風に流されて市街地の上空600mで爆発しました。

当時からある建物(原爆ドーム、レストハウス)を見て、広島市はモダンでにぎわっていたのでは、と思っていました。それが一瞬で焼け野原になった事を想像し、言葉を失いました。

写真を見たり、話をきくだけでもつらく悲しい事であり、原爆の力をまのあたりにした方々の苦しみは、想像することができません。

そしてその苦しみは今もなお、世代を超えた人々の心と体をむしばんでいるとわかり、原爆は本当に恐ろしいものだと感じました。

そのような中で、海外から広島への支援が思いの外手厚かったことも知り、驚きました。

広島に家を建てたアメリカ人のシュモー氏や、親を失った子供と私的に養子縁組を結び、養育資金を送る「精神養子運動」など、さまざまな救いの手が差し伸べられていたことに心が温まりました。

そして翌日の式典では、始まる前から色々な方が祈りを捧げていましたが、8時15分になり、80ヶ国もの人々が一斉に平和を願う様子を見て、どこの国も思いは一緒なのだと実感しました。

核兵器は使われた国だけでなく周辺の国、使った国にも悪い影響を及ぼします。

国同士が武力以外の手段で信頼を築いていける、平和な世界にしたいと強く思いました。

平和行事参加の旅

小林 初美（50歳代 女性）

ピカドンが落とされた広島は今も尚、お亡くなりになられている方々がいて原爆死没者名簿には30万人を超え平和記念式典までに、2745人の方々の名前が記帳されたそうです。

私は小学生の時にまんが「はだしのゲン」を読みピカドンを知ったと思います。“ピカドン”というものは、原爆の表現だと改めて広島平和記念資料館で考えさせられました。

テレビ、ニュースなどで広島、長崎の原爆投下、平和記念式典の様子は知っていましたし十分わかっていたつもりでした。今回、実際に広島に行き、広島平和記念資料館を見学している間、「本当にわかってた？」「知ってたつもりだったんじゃないの？」「いつも平和を祈ってた？」「他人事じゃなかった？」と自問、広島と長崎以外にも原爆投下されるかもしれない候補地があった事、原爆投下の目標が相生橋であった事、原爆が風に流された事、展示物、資料、説明を見て読んで聞いた私にはどれ一つとして知らなかったことばかりです。

原爆投下の様子を上から見れるパノラマ映像で見た時は体に衝撃が走りました。投下からたった10秒で緑の街並みが、川が・・・変わりはてて・・・これが現実に来たことなんだ・・・本当に恐ろしくて恐ろしくて、怖くて目をそむけたくなる程の地獄図に言葉が出ませんでした。

こんなこと二度とあってはいけない、あっていいはずがない！！

遺品、ご遺族の方々の展示には、無念があったことでしょう。怒りと悲しみがいりまじって言い表せない感情を訴えているようでした。

そして、資料館での被爆体験伝承講話、被爆者寺前妙子さんのお話の中で、自ら被爆し、左目が飛び出している事も気づかず必死に逃げ、川を泳ぎ意識を失い助けられた後に、左目は無くこぶしが入るくらいの穴があいていて帰宅すると弟さんたちから「お姉ちゃんがおばけになった、おばけになった・・・」と言われ鏡を見せてもらえなかったという生きた証言を聞き、胸が痛くなったことも忘れられません。

翌日の平和記念式典への参加はこれまで以上に、記憶に残ることとなりました。

広島市内の路面電車にて原爆ドーム前の駅に着き電車からホームに降りた瞬間、自然に涙が出てきてこみあげた感情は予想外で何と表現して良いのか戸惑いながら式典会場に向かいました。

式典でのこども代表「平和への誓い」の中で、「未来の人に戦争の体験は不要です。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」この言葉は世界に共通して言えると私は思います。

8月6日、8時15分は唯一の被爆国日本が国籍、人種、性別、年齢を超えて様々な人々が「平和を祈る」「平和の尊さ」を訴え続ける日。このことを、この日本という国に生まれた私はこの先の人生において後世に伝えてゆく責務があると言えましょう。

核兵器を根絶し、世界の恒久の平和を切に願います。

小金井市の平和行事参加の旅に参加させて頂き、本当にありがとうございました。参加できたことを感謝致します。



平和記念行事に参加して

小林 由紀子（20歳代 女性）

私は平和記念行事に参加して普段の日常生活では得ることのできない感情を得て、見ることができない景色・風景を見て、平和への願いを募らせることができました。

平和記念資料館では当時の人々が使っていたものがたくさん展示してあり、原爆の被害・威力を自分の目で見ることができました。また、伝承者の方の貴重なお話も聞くことができました。その中で私は特に感じた思いがあります。原爆の被害を受けた人々は私達となにも変わらない日常を持っていた人々でした。それが原爆によって全て無くなってしまったのです。戦争が終わり幸せで平和な日々が戻ってくる未来を、数えきれない程の人が望んでいたと思います。戦争が激しくなるなかで必死に生きていた人がなぜ当たり前前の日常や輝く未来を奪われなければいけなかったのか。資料館で見学中、そのようなことが頭から離れず、ずっと考えていましたが答えは出ませんでした。なぜならその問いに答えは存在しないからです。命を奪い未来を奪うことをしても良いという理由は絶対にありません。親・子ども・友人をなくし今もまだつらい思いをしている人々がたくさんいます。――奪われたものはどんなに願っても返ってくることは決してありません。人々の苦しみが癒えることもないでしょう。過去は変えられません。――未来はいくらでも変えることができます。人々の平和への願いを感じ、皆で力を合わせて平和な未来へ歩むことができれば同じ過ちが繰り返されることはないと思います。ですが、核を保有し過ちが繰り返されるかもしれないことも事実です。もっともっと多くの人に戦争のこと、原爆のことを知ってもらい、世界に平和が訪れるように自ら行動にうつしていかなければならないと思いました。



平和と安全

片倉 健太郎（50歳代 男性）

広島から戻って核への意識が高まると核兵器や原子力に対する感覚が敏感になったようです。ヒバクには被曝と被爆の単語が使われていて、どちらも「ひばく」と読みますが、意味は違い、曝(さら)されるという字の「被曝」は放射線を受け浴びるという意味で、爆発の字を使う「被爆」は原爆など爆撃によって被害を受けることを表すと知りました。

平和記念資料館では大勢の子供や若者達や外国人の方々と共に被爆の悲惨さを見聞させていただきました。被爆体験を伝承者のお話で聴くことができ、展示パネル・ビデオ・遺品等を通して核兵器使用は人の道を外れ、人間にはできない、正当性の欠片もない事だと改めて感じました。

そして被爆者の捜索救助に広島に入り被爆された方々の壮絶な闘病体験を通して気付かせていただいたのは、私が今まで核兵器と原発を別々に捉えていたことです。原子力の平和利用としての原発の安全性確保は被曝作業されている労働者の方々により維持されていて、その被曝により肉体的・精神的に作業員の方々の命を蝕んでいること。そして実際に原発事故が起きていることを決して忘れてはならないと思います。

現在、核弾頭ミサイルが日本上空を飛び交う恐れがあり、今後も核兵器がある限り、邪悪な権力者・指導者により、いつ使用されるかわかりません。それでも希望を持っているのは広島の惨状を知ったことで不殺生を訴えるようになったという元朝鮮戦争従軍兵だったアメリカの平和学者の存在です。彼のように暴力容認から一転して非暴力運動に身を投じ平和に貢献されている人々は人類の希望ではないでしょうか。

被爆者の皆さんの願いの実現に一步近づいたと言える今年7月7日の国連での核兵器禁止条約採択という世界平和の大潮流の中で、核廃絶と同時進行で反戦・非暴力社会を求め、世界中の人々と力を合わせて安全で平和な社会を実現してゆくことができると信じています。

あるニュージーランドの平和学者は、一般市民であってもその場所で平和のために貢献できると言っています。日頃から家庭や職場で誠実に穏やかに生活するように心掛けることが平和を保つことになり、平和は築かれるとして、教育・福祉制度・文化交流等が持続可能な平和な未来を築く大きな要素になると語っています。私も身近な平和を守り、育み、信じ、人や環境への貢献に取り組んでいきたいと思えます

核兵器のない世界

片倉 雅子（50歳代 女性）

昨年、広島を訪問したオバマ前アメリカ大統領が訴え続けてきたのが「核兵器のない世界」です。

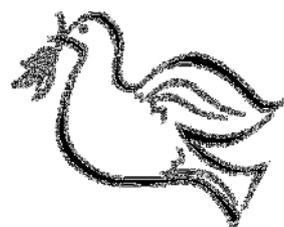
今回、平和行事参加の旅で感じたのは「核兵器のない世界」実現のため命懸けで叫び続けてきてくださったのが被爆体験の語り部の方々であり、伝承者の皆さん方であるという事です。

同行して下さった職員の方の奨めで原爆死没者慰霊式と平和記念式の前日に寺前妙子さんの被爆体験の伝承者としてご自身の被爆体験も交えて語られている胤森久子さんの講話を聴く機会に恵まれました。

核兵器による実に恐ろしい惨禍の生々しい様子を想像いたしました。また式当日の小学生による「平和への誓い」も印象に残りました。「当時小学生だった語り部の方は『亡くなった母と姉を見ても、涙が出なかった』と語ります。感情までも奪われた人がいたのです。」との部分に涙が溢れ出しました。

広島で、けたたましい蝉時雨の中、快晴の夏空を仰ぎ見るように真っ直ぐと立つヒマワリの花の姿を見かけた時、核抑止論や核肯定論の中、平和への強い信念を胸に被爆体験を語り続けていらっしゃる語り部や伝承者の方々の毅然とした生き方と重なりました。

被爆者の皆さんの願いが実を結んだその一つとして今年7月に「核兵器禁止条約」が採択されました。微力ではありますが、私もヒマワリがたくさん種を実らせるように、戦争の悲惨さ、命の大切さ、核兵器の違法性を次の世代に伝えていきたいと思えます。



「戦争体験談」

「平和行事参加の旅感想文」

発行 平成30年3月10日
小金井市

編集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
小金井市本町六丁目6番3号
☎ 042-387-9818